

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0

180

170

160

150

140

130

120

110

100

90

80

70

60

万載狂歌集上

李勣





とくころ小まんざいおぬとふきこもさへてまじく  
ごきげんあいきとあつくるあくしまのとくも  
とくよかしてとくとくとくとくとくとくのとく  
とくべのをあやんがたちとくとくのとく  
かみれうおきとくとくとくとくとくとくとく  
まあらわいみよのまうとくとくとくとくとく  
のとくとくとくとくとくとくとくとくのとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくのとく  
一花ひらけ二花のとくらハ二月三月三花の  
ねさんすのあう四花のとくらハ秋秋乃

天あやのとくらハ移相のとくらのとくら  
むつのとくらのとくらのとくらとくみハな  
とくらハやま川とくとくとくとくとくとく  
とくとくみナ花のとくらハとくとくとく  
十二花のとくらハ十一十二のとくらとくのとく  
こをとくとくとくとくとくとくとくのとくとく  
ちよこぶよとくとくとくとくとくとくのとくとく  
かのねとくとくのとくとくとくとくとくのとくとく  
四花のとくら花のとくら花のとくら花のとく  
ナ七花のとくら花のとくら花のとくら花のとく

ありまくせ百あまりのす十七の巻軒かの三神  
乃まう神ちのやうとねうどんれハ雨うれと  
ゆうらと風うらとよきちうと夕べとよ  
やうせよしてむかへばくとえをもあくに  
う音みうちわりやれとうれくとくうう  
まくらうのよくをふもよこくううう  
へあくとあくきうがまくはかのとがまく  
うあく室引のあくすひくさくああまく  
乃まくせのうくうくうほ方赤くうく

たまれ秋ハラモアヌ神代よりうまるとあくを  
ひととや人の代かうまるとあくをやく  
もまううよひとくひいきう三河まさんのはつきよ  
うきてちらのうようくよにとさひがとのほる  
あくくよりかうせらかくとく一みうち大目小  
えく十年より一てまくらこのまとあぐも  
かくひうまうくらあくとくうみとあく  
のまき人まといとす乃まと吸おうちよく  
独活の口うくふれやきせのまきのと  
あれ三帰山の秋のう一キのちと二キよひき

さきこぢにかとくらむれをかのむのむの数より  
あけしといへとむりゑくよのこある葉のにはて  
世の中のうあまくあくへるゝひあくさう  
タタキねハハをとのあびとぐともりをと  
いさめのつことどんともいもぬうこき代よりあ  
てあふあふそのけ風もくらす古今夷曲は撰  
夷曲の二つの葉をあくよこよのあうら  
あくじきあととあくよとみあくゆと花名を  
幕をもるのあと月をよ降すハあきのゆゑ盡  
わよよくらむ出侍題をもううのむ人のとよ

おのむよいつけむけるをひくつひよ歡樂と  
すく哀情とあくよちとむけとのとくよせ  
ふくよむうこよむくまくせよともいよ  
今のも別あくよの字法大あくのわくう  
ふくよひよひくう字架よかとあうさうりれ  
もいつくうううせきうちよとあまくよるさはく  
せまくよとくよとくのあひくよくよと  
うの集よのせとくふやつませよとく乃まさこ  
のをま川よとくよとくもあらあみのうとく  
まくひくとて万載さくうおぬとよつく

巻一

四

これに戸まぐのひらちのやへいよのまとう  
さうや天のみつの／＼もるの日のうごくと  
あうひびきゆるよろんありきる

朱樂菴江

萬載狂歌集卷第一

春秋上

春もあらうる日よおる

貞徳

さむ娘のまことひぬくや／＼ふけ／＼とくとく春

あけら菴江

梓姫乃／＼ひなづ／＼山のとあ／＼と方小草やえ／＼

ちのち／＼

四方赤良

くれ行の世の人ち／＼小ね／＼すれ障子と春ハ来よ

寅のと／＼まわ／＼

金／＼東作

東風吹き今年も首とす法師もこのやうの春を述べて

年のち免百人一首ふとぞくへとおどる

川中少

か夜橘洲

まうひくそむを痛きもう脣は九重の花のお江戸

年のち一ゆす

脇穴主

今朝はちいりく扇の天地金ひくわきよき年中の春

ひちぢく

よしんへんじく

ひちぢくや曆家の詠行かうとまく女の大荒をふす

けよ延宝三年のことを下みよす

芝浦早春

演きゑん

浦の京ちりややまとま約の萬よまにたゞせきの浦

船松飾

川井物梁

風の逝く入ある事とまうまうまうくと春の曙

あつて东化

波のよも子の日の舟をふけり事ひとも小松志ちかハ

小鶴のみよし

後あらまちうとも小浦座船の湊小風とまうかまくちう

蔽中樹

すよ御代がくこのねまうよかうらへ仲送了松

鍛冶初夏

隣鶴

まうよう拍子ふらん天のやうことをすら鍛冶初夏

扇賣

奥波

春子今朝あまくとよひてねと行よ枝うしませ  
ううう画うすみすれこのうふ 細井翁  
さうすらふうてはのち生とほしやがた有りもへもあらニモ学  
少しちきのちねつゝとよひて

四方赤良

そこの子のいとふゆとこアキセハよ先御ひつうちん娘子  
羊菴むそひもく一万葉のとよきもとをきて

かとのうら

万葉小石先とよひてもううきよせりわうの板敷う形

波をよ葉

浦を干網

万葉うよよとよすまがひてつきよやゑうとくよす浦  
よ追

石部令吉

まみぢん乃あいぶらういの一聲ハいつゝ乃誰と呼子よ追

飲食の中よ度

布田造

和田郡山

はけ山もうとみとちある春の思さんうあゆハねをかや  
よ

四方赤良

子の日あらるせをふ小ねの大にハ今も賢者のぞを引

あけらまわ

よひまくりあまの娘小ねふとねの日の暮のせへ紙

掌

紀定丸

字すがちの日のままでまくらけ寝とう医  
傳う教ふ學りとむとあらう身へもゆほし

百首歌の中よみ草

雄長老

うふある宿かとハヨクゆく草葉とてゆくとあれ

七絃乃白所ととるとて

ねをひ女

やまきの雲たゞに芽あつはすと風をふと風をれ乃

うりゆく

よみ人には

まわらゆあらゆくやまく風の花をもみ  
えのうあら人のいと正女うあ

百首歌の中よみ残雪

如竹

やく墨やまひとまきの小紋とて地白のこゑやまびきえ

梅

義由己

春雨の生くやまくやう梅と折てからやう匂い聲達

百首歌の中よ

村新

さきうけの花大根達の枝ふまじとおくれをひ

お含まれ中よ

布局因造

紅梅と名ふよみゆくやうこのうふまじとやうめぬ色

隣梅

枝いき處の梅の板屏のあまうぐよのときも此

魚沼東作

山家柳

との本領

とひきみばとうちうきてむ山よきめやう柳の枝のおり垣  
山よ白人乃すとへまくらるる小常陸う柳  
竹う柳のう根つきとキみて

魚吹東北

少陵う根うて持柳ちれはうつをもやまも山  
山

柳のうめあいものもとくまもやま先を當せと柳  
ある人のうとす柳のうじくふまくらるるうかまと  
もつゝやまくとゆくうらうもあけら葉の

山よ白人

自のうでよつうまやこみよすうふまれ柳う柳  
シナマ家のも柳の花とくとく

柳菴

我年もハ六十七方アモウタノクアモ花心易  
若きふりけう柳柳と

ト巻

やう柳とこどものつまきうけとくとくの今ハ生とぞこれ

柳

栗梢

宝引の縦ちうあふ草風とまつととひととま柳

志用菴素庭

黒蟬れうふ柳もまの見眉とつうとてさてもゆうう

けうううけう柳

すのあまう

まかうけつゝくるま御とみくふせんとまくああ子

奴紙

星金先次

奴なにやうすらのあの方よもきて居る二合を取

六日正月

りものああ

うあひてこきくと宝引とひよ扇のたる正月

舟船

田舎のあれ葉と枝もあればせよまの草とゆううとす

紀のくじんと

吸つたまきとくとまくおのつじうるまたせせび

石段金吉

また舟あよと見葉や小舟のぼううちてしる

あくま

鬼窟揉痛

のくわくと寫士のむねの筋うちをせめんとまくまく

大年

五十九

猶新

あくまくかきこみゆげとまの舟とえ毛の草のつじま

百首もの中よア巖

きさくまのうへとあらわしおのうへと生とよ巖

いもむきよるとくいけると あくら若江

山々ふつする至齋乃洋をしまく乃よとて後すゑに

初午迎

もう年ハしづきのうふやくちーかとや憾のちとつけてえ  
初午のうよみはさうれハ 浦多干網

初午のうの出生めハ何のばらうとくち鼓のむのうとん

西行忌

康津移ま額

三月自のゑああとてきさうせうふきする富士足西行

乙保安

じまくと世とのれうききうきうける佑多憲清

春波中  
かべの中塗

ちる風よかとや波巾もしめあせものあうとよきてうせん

萬載狂歌集卷第二

春秋下

花

かづ衣橘酒

刃と不瓜をすらふさう花うふのを筆年のうと

漁産

あうやうあふと人のよもへばへとへとへ花のうひる

未ほ

鼠とあへきうあれぢる花のほ葉やうとみののあう書

代為百首もの中よ

物す明浦

花のうち天狗桜とあうせておうとと笑ふ山う夢

百首歌の中よ様

貞徳

ひづるも鳥居子どもやすんを舟の奥ふあらる山神

様様

やのりあ

いぐわすくやうすまかひもくゆすまくはれむる

春の日はアスノ候あて

二葉判官集

八重一重みごとくも桜園へまよふ花の江戸を坂え

ま公人見花

長義

ゆ金玉のまほ人ハリタタキや花をれ花よゑむ

燕子

奥あおひきもあくと花れ竹幕うり外へ女中ちよ

ト者見花

カツネ桔満

弓弓花葉まつ霞風むけはちくとまよ春風うんくや井

花わらふ枝と枝よ折る人よアシテ

坡柳

あれやの巣よ花やちくらん枝と枝の春の差弁

吉永元

吉永れやうとくとくの夕く入おの峰よ花やまえ

りのあ

中の町塔うらうつー枝くはとせす。大やうす

仲野山

ちゑのゆす

山野山に籠せざれまへば花れやうとひくあふ

惜花

里乃赤

喰竹ね、了根付の琥珀川もあつてやうの塵と

汰桃花

かく衣橘湖

まうりの盡いハ花のまう敵十二りもやさまハ桃

曲み宴

罗可赤

金丸うじよ越向ふまうせしむわ歌ハ何の曲みよか

軽サホシ

羊とくもやくきはすれよてたゞよ貴玉き

あづら莧江

さうつきよさうあむあむちがふらうくゑ和九年母娘

寄花生智

鳥咲

去年まで様といひお花みのれりう縁の事も出来ぬ

馬上熟麻

まうとくもくわひまくわ多引あはらうあらやお花み

内厚

山毛白人

玉幸あれやくみかくが因み事ハ内厚子時と朝をちう  
まの日暮りへのこふもとまくは波ある厚子  
やくはれりはあくまつつい通すとひき

藝山

まくらの上の枕つい通る夜の月とやまか  
燕

はちのわが御子つらとくへきてうちまひよ出子室  
あらまに

おのうはまよとくすのあくよろづなやまねとやうす  
雪雀

かみい雪雀のきをうきよてつまむらくあらわ  
雪月

まわせあんのとくまく月の夜へあほらまく  
せの中面看る事

山と白人

まわせあんのとくまく月の夜へあほらまく

せの中面看る事

まれおのむちう月おとせのゆのむらくあまくまく

生方一刻あくへ千金とくまと

まのゆのむちう月おとせのゆのむらくあくへ千金

勝定玉

商賣もあく葉とてうき一けよ軽き叶ともう雨の日

百首おのゆよまく

まくのまくのあくもほまくあくもくのあまくまく

やまのまくのあくもほまくあくもくのあまくまく

くもくのまくのあくもほまくあくもくのあまくまく

見いらんとていまとひきとまくまく

秋

如行

あけらまわ

やかくと春のひよしとあつまうみのうよまきと

万首おのゆよ呼むる

布局因造

あらこうのよゆいとは持持と候のをする呼子をもふ

別荘よまうひとと遊ぶはよこくさあまく

さうてくく醉こらふゆかのいづくと

ちくでせひるおとし富らくさすのあくと

まく

まくよゆよくくれんぬとのみよきにの妻よよ

万首おのゆよ茎

め行

花まくよゆとゆじナ年、ゆよのひよしとあれみよ

お金れゆよ杜若

布局因造

かううのうかりよあれハソ移のつよてもくうきつよく

まう茎叶

紫れ帽子のまくよくんさくとあるとまう呼らち

跡蹕

やかくとくよあ黒れ墨くと大もくはの聲をゆき

張合のゆよ茎

布局因造

松のあくよかくは紫よ深きとくのさうるるふ  
秋葉よようこくう乃山のくくのをと

西山

秋のあそぶこ人坊のさうすゑをうりとまうくの花  
放屁の首おのゆよ郭アマガシ 宝刀赤アマカツ  
七五ハ金へきそ并みれ山吹のえひくよ生めさまれ  
驚きぬれあとうやくと  
月よ雲絹クモクラ  
へあくよらアカルとくへきくせに松のここのよどみて  
あら人の音のうよしひやけりときたのやすひの  
ちゆづりちくとまく  
あら葉に  
かくきくまとしきてうまわるこのうよ  
かくひくとまく

萬載物故集卷第三

夏秋

曉月夜

百酒狂歌の中よ首文

安井了右

まくわーまの湯のさきうらりとまわいよるが

百首おのゆよあれ

平野寛実 槟名ヒナミ

ヨヒ人の質してよめなうりよがうきせりきや衣せり

お今の中よ

行の声とゆきてりすむとあをかみと人やる

山よ向人

花はのえのよのよと引ゆつてまぶちととて育月歌

竹葉百首歌の中

お年明瑞

うきよえすまくはるはるの花とひづてにのやめり

牛舟

無所、志郎

よそいはあそびるを寄りぬ下の日ねりそくま

秋樹立行

子子孫孫

みのうらの落葉とみゆゑをもつちうら金之

卸花

山より人

どうくとよむれあくかくのよゆうとよゆうとよ

風万首のゆよ

わのよみ

山吹うちうせうせうせうせうせうせうせうせうせ

郭公

墨指

うきよえすまくはるはるの花とひづてにのやめり

秋夜鶯

うきよえすまくはるはるの花とひづてにのやめり

古今和中止

平郡冥指

うきよえすまくはるはるの花とひづてにのやめり

弓蹄

うきよえすまくはるはるの花とひづてにのやめり

左とうけんどうらる時郭云ときくて

サミツル

おみやげは舟をひきの中のアマモとおきぬとお鰐公  
三浦を討むと見て 金の師鱈

たちよかりどおのわくまし三浦乃風よ声の應答る

あくす有郎

肥ち馬夷

かくきんまくす御所汲くと井もみを引のまくわく  
かくきん體の優柔と人のとの行財

かく長橋河

うれしきうれしかつわと郭公ともよもいのまうきこゆ

鮓

卯雪

かくくのおお魚とこうきてひかわすと大あらあ

お今子中エア苗

お新寒粉

まくくやくのあくとあまくとくのあゆとふる玉を

菖蒲

あね

お波よあくまくと引くとあやうとおの妻ようされ  
ある人よもよあとあくととてまくはまくと  
花よもよあととてまくはまくと 面桜似是

一島よまたけうみて花菖蒲よもよあとまくとれの

みゆきの波縁の傳者よ岸

山より人

お園くありの傳者一孫あやちの伝子一毛いり

達道の序

印雪

本縞う一匁ひき紙のうにふや経文のせひけあり

柏絹

山手白人

ちぢやいみすよむらし柏からうらせりてすうさくす

タツムスサトカーハサウセキシテ

かくま

タコホシミルヒシホモツケのわがくまはあゆハ鏡

アヒレヒシトクニマサ

ヤのアヒレヒシ

一毛とやうようもく毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

けの毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

／＼カバハ夢をのちのうそのうひを

とまて

好茶万圓役

あううかひらえのれはまほす升のゆくゆく

口のあ

石室のううのうようちとやまたうようう

石室のゆよみをと

雄とた

かく空櫻くちくとくとく元のうひよもうちね

廻り身

かく空廻りのうつとくとくりみをとる要

産絆のま葉をあ村氏とてかく身のじよ

卷之三

妙神秋色多清輝  
萬物蕭疏有兩

梅干滿筵

細言席

色が見えぬ  
匂いの好み  
からぬ所

人の力より 茄子胡瓜を おもひせば

新編  
卷之二

せうはちこちくふきあうのがわやか  
けちよみかこのやう

漢書

譜海清吟

五月

卷之三

まくはりと月よりまくはりと辭あつてまくはり  
紅扇百首の中より四首  
今朝の水はりうきよへとけり新緑の葉の花  
お金に牛すよ雲  
平野寅折

平郊賓物

當初もおうちとひきりえなかれまつせうふ入る

齊元生

夜軍よ居のゆう火あつめりまくつ堂今戰

御府右衛門のゆき歎美文

ちうきのゆうとすくにあせうとあくのうがつれを

壁へり

木山石燕

蚊と雀よすて胆とやらかておやえまさら圓くされ

雪駒

古あそぞうひよせとタクシのとみすあけせまくの聲

おなむやみ水室

平郊実相

とうちくうやくいん水室もゆまむらるをのうじと

里あゆみ

さく斗うえ氣とくつづくお室も今あはむとくとえ

子子孫彦

タミ

春よきのえあくねきのあくとふせきのくぐりうみ

丹タミ

弓あく出でてくよ雪よしおいり拂よとてのせきのタミ

無月東化

羽ひよくタミ

弓ひよく風のよ緑の一海アケとくすりタミ

拂わく画きく囲扇

あきゆつあつはくはくとタミかくやれもゆれ

囲扇

雪あゆ

かみゆあくのゆくとくよまとうかよまくあま

百千のゆく

放生光

うるこよ式ひうらやあくらんむらよりうのあひのくま

据ちみ

蛙面肩

納涼

玉簾小春

豆すと又序きのまくすとくすとけまえはあうやく  
あ圓弓をくすとおとそく 金つと龜

ゆかく蠟燭の今すやいもあ一夜三石あくの松

芝浦納涼

審えのあそせ浦きハラターハサヒトハアハのくにほ

ねえ坪納涼

物絃のくき

山あらうあらうの峯のあらうまうり山の月の序

豆又納涼

物絃五秋

豆すと豆すと海の波の花ひきうるやさうあくに  
伊豆坪被

くらやの坪被

丹殊と豆すと生かすみをきくえもつて田の海の中だ  
うかうつてうつるのひがこうよまでせよう

あけらまわ

たまへもみふ舟をとてすよとあくのまくす

せよ

萬載狂歌集卷第4

秋音上

立秋

赤浪

立あつともや吹きしる秋風にてやむのとやうけあらん

山残のとちくのまよあまきてけり、あらゆく秋の初風

マタヨハ原

やくとすゑす秋のとちくひさか、アラ、うむあらま

初秋 郡公のとちくとちく 大根を手

あくまくハチハチをあまきてやうやくあまきてやう

せき若狭署

印中

トモハシカシトモハシカシトモハシカシトモハシカシ仕切場

七夕

夏夜中

年よ一文ああいちまかとてする物にいふとまくらう金を

うじくへ

孟あよあれハカヒとゆきまくらう銭とすむけ金を

質をもす

智惠内す

ちらくよ色やあひのや少神天の河あよあはまき

七夕琴

麻屋経吉郎

孟あよと秋うてひまくいきとせたふもつうとうひ

七夕酒

馬蹄

けんぬゆひうてハ指と手う指のつるさびとまくらう

七夕瓜

竹衣橘海

いつのせよううのゆうある二瓜うまきあこれ多よひ

七夕素麺

智惠内す

矣入のおり娘あふけゆへ天の川あくわうまき

七夕乃夜張署のつるうまき

栗山

かくよとみのゆうよみいきうるやう孟まくのあくあせ

孟あよよくほくう

筆松

ぢうくとみのゆうよみいきうるやう孟まくのあくあせ

孟宗孟

四才赤白

みをうらうかくもふうて人よのうらをすうせ  
みのうりんのあくともすもほれ

あくらまひ

煙管乃うきはせぬもを歎うてて年の一月

孟踊佐タ

アキとまく役二月と遠くうやくせんじあが

中え

狂上行轂

ちゆうかくわくのうあとく中えのきうつるや

形をすむれ煙管とく

尼興へもひとうれナクレとまし合のけよけうや肩

山す白人

もすはちる新場の萩の松風木基とう様の年やう

合合の中よ萩

平郊実材

餅あくハ社すも入く萩の花びらハよきもよけのよ  
菖蒲飾の旅眼すよ萩とく

あくらまひ

よせきゆとくもくもすの蹄あくとくかこもをくらむ

四才赤白

萩うるとむくもすの蹄あくとくかこもをくらむ

種あ村と云ひてよ萩のまゝあき

山より人

まほくすむをとまく通すまうこのひとひは皮をきれたる

女衣若

とまふ一トもさうせよと今便にさんへみさんと

風面首あの中よ

ゆゆふ風と云ひてとまよて風ふきとく人あらゆ

まよのりまくへまくけく一とまくとくとくとく

魚躍

まよのふと穂あよじとつねのまよの屋花を

唐けのこまくまく胡琴のまよと人のりい

あハ

まよひむとむとううじ胡琴とくまうらんのうるやまよ

星也氏琴女

つあひうーまよてゆうまふ船歌のあけゑがほんおづくら

相撲

ほ方赤

秋の母の端のまゝいをまひよ下をきよき小むきのま  
をまひ人谷風舞の舞よとくつづりく

とまくまく巖石おとくまくまくまくまくまくまく

まくまくとよもまくいよとくとくとくとくとくとく

芦葉

さよろくきくへ越後のあく浦ふ波のうらとどとあす

彦

ある

るこゝまであがれを白鳥のさえやどきことをおまきと  
お合の中ふ

平郡実様

あく浦ふ風の吹く松のせんじげやもみのむらちうる  
百酒わびのゆよ虫 晴月す

さうつよばらうてゆくときりくにわよとせうはあら

百首歌のゆよ

桂翁

せし草ふとうつて生のあかざよりよあすくもうもう鳴て  
足音あり

秋のあづもまよむだまくらひくとくと寒れむる

即一ノ月

通小級良人

吉川

えふとこ夢さうくあまなあくらまきせんざい

貨をすら麻

経麻立起

あのかくおちまよむくとく麻ハラシと小袖のつまやあらん

えふとこうのゆよ

紀伊守捕

えふとこよおよもくうくと米桂まともあきの夕着

萬載狂歌集卷第又

秋歌下

月

貞徳

月ゆつよりくけ世ふかきよたの中てはるくとくも  
さくさく百首歌の中よ

二月

喜居思す

天のテもよまれちまうのあれどそりとて鎮ひそら月

橘貞風

すくの糸紗のばるむまじ翁刀あらの月をよやき

ちづきナ一日の秋月とあきて 薙斜

きんこちかくとひてみれ十日ぶりんとあら月の西

八月十三夜月

あけらめに

きち出まやうんやの月とありぬハ秋のすうハアムアム

十八夜月

春月葦素庵

あめ秋月

濱毛真人

くろくろいんまやまらうらうよきじとくまであをとゆる

山毛白人

桂宮ハトテウトテウマツのわらをもてから月の

筑波根岑依

名月のあと豆豆のあそもやあくこゝとむれうしまで

着まう

お月あらうくまへたるやううまうりてお名れまよ

十九夜雨つゝあ

ちゑのあ

名月の雪さらひるあまうくまくぬ雨夜のやがくうか

十九夜月蝕一あ

燕斜

あらまね柳とやらむらんの月もあふさうる今宵ハ

林人

あらく星よまたとすハラシキんうくとあるまん月のえ

十六夜月

望月あらわ

タエ方のまうじゆつまきはまくわくとまきのじよひの月  
十七夜月

あらわまくわ

めきとももとすくわせおのまの腰よきるから体の肩

燕斜

君全腰くしまやくとあひのとふれとくわくちまの匂

十八夜月

今づくつまちくとまくはらくとをすくとみの月み

志月董素色

あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

十九夜月

独人

まつかつねゆくはおの苦ま切ハ桂男のりくまくと  
おとて月のまくわく

燕斜

月アヒトヨリカクハラムのゆうりハシイクらまよゆすふきん

志月董素色

かくまてもうちきとよせんじやくと月をすましゆま  
も田のる場上月をほりく

も保

月をくらむおのつりくとやまきのくもつやま田のぞとあひ

望月あらわも田のる場をナシキモテナサセ

もて五段の月をくとまく

卯之雲

園子あ中野内のみかくまくとけの墨あ引

智也ゆす

名もえ田ちら一もとの内と見てあめいのあらきふや

生酔刃舟

卯雪

ひくきくらうるら生酔ハニウムリヤ月もくろし

山手舟

から衣橘河

白き船下テヒトテノ船みゆきすすりて赤坂もあり

浦月

室方あらん

芝浦の漁人手網とくらまくら月えりよ鮎手外

翠指見月

カビ本町

しきれはあつゝまで月今宵もうもゑへさを園の床

月あ月

四才あらん

碎きのひしつされ様さる風のうるひとえあらね

月あ眼鏡

生来秋万作

月あとうつとくのむうさだひあの波よりててこれ

月あ碁

峯松風

月あよすのう石うらむきてま一うの盤のまやう

月あ三味線

あせんのねくわまふ月それハうとむ達ハラ乳

月あ迷信

里す赤まに

せの中ハシツモ月あすあれ設さてまへかひの行ま

十三秋月

栗山

ツシムシムカハとこやく三内のおよが教ある十三秋月

益田忠之

月ハシツモ月リテラヨウ亭を定ハセテ十三秋月

宮方赤兵衛

十三秋月モウタモイニテシムヨ月のうりの雪ニカカラビ

十三秋月モウタモイニテ雪ニカカラビ  
十三秋月のうりの雪ノ時を渡と　無口、志郎

十五夜と月あらわきあ十三秋月のみさよ雪のまわるや

おすゝニ井もと

まゝ秋月のうりつづるはうから今宵の月よ四つ

おすゝくまみと

まゝ秋月のうりつづるはうから今宵の月よ四つ

おすゝくまみと

あれとようきやちくわあらまどひまつ千骨

おすゝくまみと

おすゝくまみと

十四あすう三内のあすも月のまの月々ハ五代よやちを

秋世経

地界有武

さあさんけさんけの雲秋みて月すりかよひうては

大坂をゆく女

秋の舟のよ／＼風よまといひてとまもあ／＼やふう／＼す

厚

かう令もりのよま／＼とま／＼とま／＼とま／＼とま／＼

桶口闇月

天はす厚ね／＼とま／＼とま／＼とま／＼とま／＼

漬きし美人

厚連山

卯雪

初鮭の一人きうて二人ち／＼さ／＼め／＼れとお／＼せ

卯雪

彩酒

齊のこ／＼あ／＼け不のり／＼と／＼と／＼のつ／＼

新酒正季

演きし美人

よ／＼のよ／＼とま／＼とま／＼とま／＼とま／＼

布多因造

演きし美人

あ／＼趙あ／＼よ／＼とま／＼とま／＼とま／＼とま／＼

書店墨す

絆

山ゆ白人

百八の／＼あ／＼とま／＼とま／＼とま／＼とま／＼とま／＼

山ゆ白人

朝あさひやひよる人のうへとまか

うきとまきて

馬蹄

かくはまかくまのうへふうかくちるのうへま

お今の中よ菊

平野寛林

菊のとみー彭祖もすまよがアドラのハル

菊と根いきくとゆくとぞて 末渴

菊のとみのゆ

勝宣

神垣と株よこゝるあく菊、おもし里ともあやまわる

ほくゆくのすのすのう我菊、まよまけぬ力つよあ

號大菊

宮本赤兵

大菊とくらむね秋はまよ草の小菊と折りかすもく

吉宗菊

秦政昌画

まよまよすすりかうりかうりうちおいくじ菊の花のをゑ

絆や百首中のゆ

也ての明浦

うるうらよすす神垣をくらこて七八尺の大菊うし菊

お今の中よ紅葉

平野寛林

わく山の紅葉とくらむすら菊のゆゑびゆ

もへとまよ紙とたゞわやまけおもれらまよ紅葉

木端

もへとまよ紙とたゞわやまけおもれらまよ紅葉

法事もうてタシムは紅葉をえびす

齋庵鬼守

タタキまわさうとや紅葉のまつういあくすまほん

風面首のゆよ

むかわくら

タタキまわさうとや紅葉のまつういあくすまほん

放屁面首のゆよ

むかわくら

おぢくね放屁とや紅葉のまつういあくすまほん

内舟

山車白人

秋もとやく一里もちへつりすむ山車のまつういあく

内舟

山車白人

萬載和歌集卷第六

冬歌

百首ものゆか初冬

雄長老

いつうのあるせあうそ神音肩負之神ハ矛ともあれも

火桶

卯之雪

まへまへまへてひるやうに火桶ハ老の妻曰あ

経日

そのゆふものゆふとくまへまへまへまへまへ

百首ものゆよ附兩

きくくは

若田娘をうけよやあうせんあうとおまへまへと

あくま

うごく、百首うちの半よ

四方赤ら

きの半よ、时雨のやうに宝瓶でもうてひるがすあれう  
う仙のいげ花とよほうて、志月菴素庵

うううう又も一のみぬよりくらりよう美もゆりうき床のう仙

及格彦宣

へほくあ作

往吾れ松のううよかんむ月かんまからくうすれをま

谷中彦宣

池杜氏祐方

ちくとしはの葉をくちうちく風や上野のやまみとほ

お会れ中よ喜

手取さむ身

まちあさまねの木もくはまのほねりうそとあらめよれ

さぬ町ふきや町ニえの駕スセとアシテ

卯雪

うきよせの秋すまううく

柏延

かくのううれた轍とよまよまうる正しくきくまは

まよ

山人ハ冬をひすきまうくもあくまかぬせとさく

お今の中よ千る

手郡実加よ

まかせはまうくのまよハおうなよせよ千よえよ

お今の中よ千よる

布弓田造

おひる等のつるき羽うちれとさよ鴨の音首  
をもる

かくに擣め

地どもゝの翼あらうとま中のそまゝふるものとわ  
而首ものゆす散

如行

あくまよまれとまゝハシモニの篠あく見のむ散引  
多かねくら行者もこういはう

一之

あくまの音のやまふ冰もうもうとあくまとがま  
和也

卯年

のらくへ機くゆきとまのちもまく和也ハシモ升跡

### まほせ

あくらまじ

うをもとやおもとのまきといふふたのあくらまじは  
まよ音のまよ

まよ音のまよのまのまよとまよ音のまよせ申

廉はねも義

あくまのまのまのまのまよとまよ音のまよせ申  
まよ音のまよのまのまよとまよ音のまよせ申

まよ音のまよのまのまよとまよ音のまよせ申

まよ音のまよのまのまよとまよ音のまよせ申

二

まほせ

まくと一トでまの上あべかくうまよ辻のつきを  
けし、りお門壁風をひく家の屏風と  
あらわし

同くう佐世氏ある家とおもむりけんしよ  
あくまあたおをあくまぶ。 借り人和流  
神のあらのせうもきくとせう作手の達つてりあらま  
吉中白翁

次を船足

伯母をあととそきす筈の魚山詠きすよをと  
ちの日友のかとどう向賀山のアマウタ改稿  
金二と鶴毛か仰あらのまのいき飯くひゆきれするま

小波とよふとよふとよふとよふとよ

の小波とよふとよふとよふとよふとよ

豊堂

縁入のあらきひきとまくはあらうつまくはあら

縁起事

経廻

もとめのとよみちうて自とよとのとよのとよとも

川びり縁

柏庭

かとよきて川びりうちまくはまくかくまくはまく

まくられやよむる

布当田造

ふくのうのうせよへとやまくつとくまで引じよの山里

吉中白翁

書を存思る

我庵の秋のまつりとまつにまつてくふをかたる  
あまきのまつ季のまつとくとくひのまつてあ  
うとせとせとせとせ

牛糞草葉江

かよとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ

牛糞草葉江

かよとせとせとせとせとせとせとせとせとせとせ

あけらま江

借金をうつてしまれをやめられたのうとうの書

卯雪

オレハもつとまつてしまれをやめられたのうとうの書

隠海清原

書中はおつまうられを一おまとひうけら年の書ふ

かうお橋洲

ゆく年のひうけ毛内もおひうけへるふす馬子の世界

書董鬼

ひ年のひうけ毛内もおひうけへるふす馬子の世界

蛙面舟

まつ春のうち一列ア合全とまつアカツシ年とまつア

婆江

備後の山河ハナヤシとまつアマツ年とまつアマツ年

古今人集

りんがくねかくが汝等もあらうまよ年れ外  
筆風

うとうのゑつてふれあらうへきく一節と年れ外

四方赤石

おとくはよす形とらすれど、うじに年れお園不

不自由物

お石人一首のゆふ

お寺りをうさうもの質と食ひてあれうせきむき

佛印墨

へいを

経くまうの佛し年とく佛印かく地巻教あるを多ま

年の年のゆふ

好景吉圓波

老らくの里よ迎つてやるの年のきう了、むちくぬる  
とくのゆよ石人一首よまくとくとくよ

なるとき

唐衣橘海

えくやいつのとくとうううううう備錢の山ゆく

か十六玉すうる年ゆふ

ホ秋東作

七八もこの内すうる年ゆふておくうよくみゆくゆの喜

とのぞれよ石町月之岬のゆよかくよあはす

くす

おのうちくとくほれよやまとくとくは安樂うく町の喜

篇三

暮のまん丸

鬼ハ外福ハ内ヘとソリテテシトモハ年のうち  
大物もあつてさうのちどり唐襷穢散と  
あらざる

寅虎坊雞子

えの湯ヨリシテシ者穢散とソリセバシヤのどん思遊  
お今井中す僕歌

布局因造

いつ、我借鑑といふ者とちくべ候連のとて小ちうあひ

由緒承

きくすちくすおうすかくや大つこすの八お乃子

萬載狂歌集卷第七

離別歌

百首中の中別

如行

胡かクふ家ニテ隣子ありオヘシヒチヒシナシ  
後毛某子ヨレラシキ

樋口閨内

あぢくもワツ斗トアハバカズモトキモヤうよよモミ

二井半斗トモトヘカムヒマシテシケモシテ

あけら莧江

よび衣きぬの店ハアモシユカツモキ仕入いくわら

竹本経を支那波よかつもアヌサナラシモ萬圓

刀銅治の腰を斬るとまことにとつづりま  
る方赤に  
のびりくは又きくすりかく銅治らの事とをゆでえ  
卯月の比へて東北うしろむらの時梅横松の事と  
あくもとて

最時手と手あくちをれ所の事とやせる。まのをじけ  
りとゆくあくちのゆすあぬつねとくほのゆ  
名のゆくの名ふくよまくうる時 へつて東北  
見てかのをくらがくす材の山みてうつるのゆ  
経たる謹うしきてまぬつれまとひきが谷野がおうさぬ

三河の富よとまう竹にはり人猿のくすと  
虎をうきてあくうー、凶野のれく味うく  
くもりでまくうけもと木の山とこゑゆ  
じうゆくべくくわくをくく人くふくくと  
牛めう山かくよ虎をくくとくとくとくとくと  
不く却くうくめ

浮城草巻物

毛蒲ふと名残とくとぞくよ山中まくへ送了猿  
木の比かぎのゆすまくうくる人とおもて  
軽サあらん

すまくかくの神くもみちの小春の樹うかぎ紋

アツムアヌヌアヌヌアヌヌ  
ヌカツルトキ  
ちのゆす  
スルジノモトヒキテモトヒキテモトヒキテモトヒキテ  
三井物業とよかづる時 へつあむ  
富士さよならをかきだのちひりも者のものもと  
絶波よからべき日もひつきやうよ碎月樓にて  
人くじまのとみじけしれど

田中文起

竹本  
住大美

牛込のおおきな夜をせみおひりうおかこうとゆき片袖

### 萬載狂歌集卷第八

#### 羈旅歌

百首のゆゑ旅

猶新

紛らぬ女宿うきはま誰ともおちきとみて旅の夜

天神川と雨すれど

梅仙法師

天神やちやぢの雨のする時ハせんどうまごうとよく  
さやの中山をて

卯雪

とくとく又こゑどとひきや時用ちうそとゆの山

塙の山とく雨すれど

山岡法師

塙の山とく雨すれどうそとくとくとてるちうちう

まうかのふくらの宿にて

す秩東北

はあらまよ詠詠しつきもくとま一のやゆる旅

多次にて

栗山

旅人とまよかうて多次のかよひものせぬ生女のえ  
十そおまよつまくあるこまよひと

多次

ゆめくら

芋とくい屁とりあみよるの旅雪見るの身とまよひ  
九月九のまくと多次とまよひてのよみの  
さくうと折くかみゆまよひ

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと

旅のまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと

りよきよひと

廻口宣有

ハナとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと  
黄浦とまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと

紀連

まうかとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと  
やよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
りよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひ

田代

あのうよやくまよひとまよひとまよひとまよひと  
くまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよ

ちの花

あまくらうらゆせのとあるま川うの山のあまくら  
安寧のままで

よし人へ

ゆうがひかうてもうせよみれあひみてあひとを  
これハ源トアリ山がちかくまでうの山と  
くわうるとき強力のうみとあんあひのね

よしりつくる

母のうみくのとまうりるぬよ

柘延

寧終はまよせてせむとやき豆萬弓ひまううひゆ

度次池

内道半四郎

度次と人へてす名すもあきとく又まよ池のせまく  
もゆの浦とく

あまねのまぬのうもまくよみうすはま一姓松  
大井川とまくとく

拙堂清原

今こまく少すゆまれよ大井川と今うれ  
かひのまなむとしよふのうもよ日新とく  
けりよみのあらのへあふくがうとくま  
くヘルうむきれ粉よててま一枝りよめあ

うき

緒じうわがうのゆまくとくとくうじよまかうふ  
浮き舟若

かくまされねよまくうるは後あめよさす  
若まつてへづれ

奉久昌面

やまくわのうさづかひのまくつやくひえの鑑  
あうまほり一比えりと難美をもじく故に

こぞひゆりけり

趣口闇舟

うきくもみのうさづかひのまくつやくひ鑑の妻

あ歩半か背の中よニ奈 知真

あぬよきこゑのせとあどどくをア一二ニ奈の格

店冊

よせかて三ふ煙葉の年支とおゆとまくせとやあふ

昇井

ちりとや漫名納ミタカホてあ升てをもはなこと  
に成

さく風たすひそよがひよくうきて浦へ野

る食町旅者

里石赤古

えびす淺茅まく柳こうのむか戸よ旅唐ちふ  
いあふ波余卓志のすそ へつあせ

金きしもあき浦のさく銅ひきあれとあぬまく

浦焚ふと

あ東うらかみかねの園すくすみとあーのあらう  
よき

旅宿巨撻

竹杖為輕森葉方

あはれと旅館のやまとおきこううひの三里もまのとこ  
旅づれやむくて神うおきこうとときやんとみ川の若  
あづなす使うちる比すよ前のかとうまつさむと  
りとろそてはるかにあたらんこう源原  
乃近よあくみ湯のいと  
業寂倍故  
ううこのいとこむとむらじよすれまあさはよすと諦白

萬載狂歌集卷第九

哀傷歌

辭世

近松門左衛

あれ辞せさらうどさくもさくのちよのる様うやくやう

北窓扇一蝶

ちるくと演松風ふかまれきて波よきうじさんざの聲

八面金牛三集

いきへとぞとてとやまむすめくらむきくせ名とせ

せりとせりとせりとせりとせりとせりとせりとせりと

けうへま構はまうざうとひつ津端記乃平  
ヨヌス

足中絶赤蘋柳、ちやくす。あらわきとりよ  
集れちりゆす 紀海音

まきめん人と歌歌よ笑りきよみほ報はあつてすみれ  
辞世

柏庭

つあよゆくらきかひとさくらのまくせきく極望のまを  
柏庭、あまうきふせきのまくらうされはあむ

柏庭をいふて

よこへ

まくらくとまくらとつまむいかじのまや見てのま

こゑくある人のまくら音子其角

辞世

慶紀述

この年くらうすも背まくらふよひくらやまくは

来示

あふまくふくらみまくのひくらてあくら外すみ不は

古梅園の恵

物の沖煙不あくらゆきてえきこの所のをみつくらせん  
年くら圓鏡をとくみくらうらせまへあくら

名

基くあくら事まつもあくへまうれあくらまく一

母よやくれうきわきあきのとよはうて

わゆく望

との間、うきあきをもじりきのまゆ、あらわきぬ  
折せうの身みくわうとまき。まがゆし

せよ一世人のうみゆあくまの風のうかよひとみよ

宝生かねやう事とくまく

頬に圓月

妻うやうやうやうやうやうやうやうやうやうやう

え麗ふとくみく

印雪

君生まててあうまよよのじべきまかくまくまく

まくまくまく

お宿をまかう一圓馬よ寄柏院賀田とすと  
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

口乃赤兵

ひきうきのうきうきうきうきうきうきうきうき

むのうきうきうきうきうきうきうきうきうき

わくす門よ唐琴のうきうきうきうきうきうき

蛙面肩

虚處までりくも向やうけのあをりうきうきうき

妻のうきみく

へつ東北

山の井もあきやれをきの風を思ふとうん  
考うれはあくとまくというれやれわざわざわざわざ

る田のうとくとくわくとくとくわく衣橘河

ノコト

やまきどやまき地とふあむとくとくれよ死生のし人  
あくすもすちのまよすきるまわ内  
とくとく

とくとく

とくとく波よ神とおびけまくのるのせのじまま

とくとく

古せ猪旅

石首のゆよ

如行

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
人生變化のしと

山里え縛

あま川とねりとくとくせとくとく波とつかよの事

